

浜松文芸館だより

No.53

公益財団法人 浜松市文化振興財団

いざない

発行 浜松文芸館(文責:下石)

企画展【版画と小説でつづる井伊直虎物語】開催中！

平成29年7月2日(日)～9月3日(日)



「五月雨を集めて早し最上川 芭蕉」梅雨時に降る雨、五月雨は、時に激しく、時にしとしとと降ります。この恵の雨がもたらす恩恵を被り、雨に濡れた紫陽花の花を楽しみながらも、どうかこれ以上雨による被害が生じませんように・・・と祈らずにはられません。



さて、浜松文芸館の展示が新しくなりました。今回は、「女城主井伊直虎」第3弾、浜松市在住の版画家・熊谷光夫氏の作品による「版画と小説でつづる井伊直虎物語」を皆様にお届けいたします。刀や槍を手にした直虎像をはじめ、直虎ゆかりの南溪瑞聞和尚や新野左馬助親矩、小野但馬守政次、井伊直政などの人物像、そして、直虎の故郷の風景等27点を解説文を添えて展示しました。

作者の熊谷光夫氏は、直虎を世に送り出した立役者だと言えます。かれこれ30年前に「次郎法師」の存在を知り、更に調べていくと「次郎法師」が「直虎を名乗る女性」であったことが判明。興味がわいた熊谷氏は、直虎の姿や生きたその時代を版画や小説で表現し、今に至っています。「子供の頃から仏の道に入り、かつての婚約者の子・虎松(直政)を育てあげた直虎のつつましさを版画では表現してきた」と語っています。たおやかで凛とした直虎の姿を、是非、ご覧ください。また、ドラマとは違った味わいある小説もおすすめします。併せて、「遠州八景」「浜松八景」と称する風景画も必見。絵葉書にもなっています。

新たな感動と発見が生まれるこの展示を多くの方に楽しんでいただきたいと思います。



館長のひとり言・・・ 祇園精舎の鐘の声

こここのところ起きている事柄に、立腹を通り越し憤死しそうな私です。好き嫌いは所詮個人の好みですから、その観点でものを言うのは言語道断。でも、誰が見てもおかしいことがまかり通るのは、許せない。一国民として断固抗議したい！話題に上がっている方々の言動は、その方のその任にある資質だけでなく、まさに人としての生き方を問われること。そこには、思い上がりや傲慢さがはつきり見て取れ、恥ずかしい限りです。そこで思い出したのが、「平家物語」の冒頭。「祇園精舎の鐘の声は諸行無常を表している。おごり高ぶっている者も長くはない」と、国語の授業で学びました。その通りです。もともと、物事の一面だけで判断し決めつけることは避けたいものです。独りよがりの考えに陥らないためにも皆と話し、考えを整理、深めていくことが大切です。そうすることで、私たちの意見や思いがやがて大きな力となり、世の中を動かし変えていくことにつながる、そう信じ行動しようと思う今日この頃です。

数か月間通った京都での予備校時代については、みのるは何も語っていない。母への慚愧の念から、恐らく真面目に勉強したことと思われる。大正 11 年（1922）4 月、みのるは無事広島の山陽中学校に編入して、5 年生の 1 年間を過ごした。この時のことでわかっているのは、下宿に入った泥棒を柔道 2 段の腕前でねじ伏せたということぐらいである。

山陽中学校は、明治 33 年（1900）設立した私立広陵中学校を前身とし、大正 10 年広陵中学校から分離して開校したばかりの中学校で、校長は創立以来の鶴虎太郎であった。みのるは開校したばかりの真新しい中学校に編入したわけである。校主と校長側が対立してできた学校だったので、生徒は半々に分けたのか 5 年生まで在籍していたのである。現在この二つの学校は山陽高等学校と、広陵高等学校になっている。

4 月、みのるは立教大学文学部英文科に入学した。浜中時代から文学に興味を持ち、詩を書き始め、文章を合評し合っていたので大学で本格的に勉強しようと考えたのであろうか。

立教大学では水泳部に入り、短距離自由形で全日本ベスト 5 に入る好記録をマーク、主将に選ばれている。詩人サトウハチローは立教の先輩で、レースが始まると必ず神宮プールの玄関に来てみのるを呼び出したという。その一方、詩人佐藤惣之助に私淑して、詩やシナリオを書き始めている。みのるの立教時代（大正 13・4～昭和 3・3）、惣之助は 30 代半ばで、大正 11 年に「華やかな散歩」など 5 冊、12 年から 15 年までは毎年 2 冊ずつの詩集を刊行、華々しい活躍をしていた。惣之助はその後、昭和 8 年から作詞も手掛けるようになり、東海林太郎歌の「赤城の子守唄」や、古賀政男作曲の「緑の地平線」「男の純情」「人生の並木道」「青い背広で」「国境を越えて」等々の名曲を世に出している。彼は、サトウハチローの父で「ああ玉杯に花受けて」の作家佐藤紅緑の弟子であったから、ハチローを通して紹介されたのかもしれない。

『浜松百撰』に寄稿した「唄え！浜松」によれば、子供の頃唯一記憶に残るのは、「伊左地、佐浜の肥とり男ひしやく 杓しやく かついで、かめ覗く」の唄ぐらいだという。浜中に入って、

乳色の月光は甘く優しく アジサイはなびらの花片にふりそそぐ その花蔭で彼と彼女は抱ほうようの
美酒に酔い続ける 夏近き夜の小夜曲の調べが 咽むせび泣く如き中に…。

そんな詩を作って有頂天になったのも、その頃であった。そして僕は、浜中から京都、広島へと放浪し、ついに立教の英文科に学んで、今では「はやり唄、作ることの喜びと悲しみ」をいやというほど味わうようになったのだから嘘みたいだ。

と書いている。

大正 8 年の早春、2 年生の 3 学期、五社神社の坂下にあった映画館で、学校から厳しく禁止されていた映画「生ける屍しかばね」をこっそり見て、みのるはその映画の中で唄われた「漂泊きすらいの唄」にすっかり「しびれて」しまったのである。果てさえ知れぬシベリヤの曠野を流れ流れて行く旅人の姿に重ね合わせて流れてくる「カチューシャ可愛いや別れの辛さ せめて淡雪、解けぬまに…」の哀愁あふれる唄にすっかり感激してしまった彼は、伊左地までの 2 里余りの道を自転車に乗ってひたすら唄い続けて帰ったと述懐している。

こんな下地があったところへ、サトウハチローや佐藤惣之助との出会いがあって詩人兼作詞家の清水みのるが誕生したのであろう。自身も「笑い話になるような、このうろ覚えの唄に刺激され、この道一筋を歩き続けた」のであろうと言っている。